

発表者名：安藤 可奈子

所 属：添乗看護師

抄録タイトル：添乗看護師を取り巻く環境

添乗看護師という言葉がいつから使われるようになったのか定かではありませんが少なくともその社会的認知度が非常に低いのは事実です。

看護師＝白衣・病院というイメージが定着している中で、添乗を専門にする看護師が現場で様々な困難に見舞われ力尽きるケースが多発しています。

一昔前の教育旅行は学校の養護教諭か校医に勤務する看護師が同行するのが常でした。

しかし最近では生徒の持病も多様化しており、その対応により高度な専門性が求められるようになって、添乗看護師のニーズは高くなっています。

短期間で健康状態を把握し環境変化に伴う身体への影響を考慮し病状に合わせた対応をするためには、高度な知識や技術が要求されますし、その責任は非常に重大です。

しかし中には、そのような知識や技術は勿論その意識すら持たず、自らが旅行者気分で遊びや買い物に夢中な者や応急措置すらまともに出来ないペーパーナースも多数存在しています。そのためか添乗看護師の評価は低迷しており、旅行期間中は昼夜を問わず 24 時間体制で対応する激務でもその賃金は一日につき一万円台と非常に低いため、高い志を持って自己研鑽し専門的知識や経験を持つ添乗看護師はその生活維持が困難となり、やむなく転職しているケースが増えています。

看護師が添乗する場合、その依頼方法は①個人的依頼②派遣会社からの依頼が主流ですが、①の場合は責任の所在が不透明になりがちで看護師個人の負担が大きくなるため、現在は殆どの場合が②となります。規制緩和で医療職の派遣会社は数多く、その雇用条件も様々ですし所属する添乗看護師のレベルもまちまちです。また医療職経験者が居らず現場の状況を理解出来ないため、問題意識すら持たない派遣会社もあります。派遣会社の設定する添乗看護師の入札額はおおむね一日につき二万円台前半であり、その低額にも問題はあります。

また添乗依頼する学校などと派遣会社の間に旅行会社の紹介がある場合が殆どですが、経費節約の一環として添乗看護師の費用を対象にされることも多く見受けられます。過去に大きな病気や怪我がなかったから今回も大丈夫と学校側に説明をし、看護師の付き添い自体をなくしたり未経験の安価な看護師を同行させたりする場合があります。

このような現状では旅行看護の質は低下し社会的評価を得るところか、安全で安心な旅自体が崩壊しかねない状況です。このように厳しい現状の中、唯一私達添乗看護師を支えてくれるのは、参加者からの「ありがとう」という言葉です。

私達は旅行看護の必要性を訴え続け、安全な旅行であるように、楽しい思い出になるようにと今日も添乗に出掛けます。